時論公論

非核化は実現するのか
――米朝首脳会談の行方

国際ジャーナリスト
泉　洋海

一度は中止が発表された米朝首脳会談。北朝鮮が不誠実な態度を取ったり、米国のトランプ大統領の側近を批判したりしたことに加え、米国内強硬派の暗躍が原因だが、金正恩（キム・ジョンウン）委員長の素早い軌道修正で再び息を吹き返した。米朝はともに当初予定通りの開催を目指し調整を急ぐが、北朝鮮の非核化を巡る両国の認識のずれは埋まったわけではなく、駆け引きは今後も続く。

駆け引きの天才

「ひょっとしてトランプ大統領は駆け引きの天才か？」

韓国、北朝鮮に詳しい日本人専門家はそうつぶやいた。トランプ氏が突然、北朝鮮に対し米朝首脳会談中止を知らせる書簡を送り、北が慌てふためいている頃だ。

「あなたの直近の声明にあった激しい怒りとむき出しの敵意を考えると、今この時期に会談を開くのは不適切だ」―。

会談中止の直接的なきっかけは、北朝鮮の崔善姫（チェ・ソンヒ）外務次官が「朝米首脳会談の再考を最高指導者に提起する」「われわれは米国に対話を哀願しない」などと発言。強硬な姿勢をとっていた米国のペンス副大統領を「間抜け」とのしったことだとされる。「金正恩は取引に値する男だ」と評価していたトランプ大統領もさすがに堪忍袋の緒が切れた。

この反応は、北朝鮮も想定外だったとみえるが、ここからの対応は素早かった。金桂冠（キム・ゲグァン）第1外務次官が「米国の行き過ぎた行動への反発にすぎない。会談は切実に必要だ」などと発信。これまでの北の発言は最高指導部の本意ではないとして米国に再検討を促した。

これに応じるかのように、トランプ大統領はツイートで「北朝鮮から温かい発言があった。平和につながればいいと望んでいる」と語り、当初の予定通り6月12日の会談開催もあり得るとした。駆け引きに長けた金委員長だったが、トランプ大統領は、主導権は北ではなく米国にあると思い知らせたかったのかもしれない。

朝令暮改

そして、電撃的な南北首脳会談が再び開かれる。米国から、米朝首脳会談中止の書簡を受け、戸惑いを隠せない北朝鮮の金委員長が韓国の文在寅（ムン・ジェイン）大統領に「会いたい」と呼び掛けた。金桂冠第1外務次官の発言などから本気度を感じ取った韓国も金委員長の申し出に応じ、再び南北首脳会談が開かれた。

文大統領との首脳再会談で金委員長は「朝鮮半島への完全な非核化」の意思を表明するとともに、6月12日に予定される米朝首脳会談開催に向けて「確固たる意志」を強調した。

「朝鮮半島の完全な非核化」などが表明されたこの会談を受け、トランプ大統領は「大変良い対話が行われた」と述べるとともに「当初の予定通り、6月12日にシンガポールでの米朝首脳会談開催を目指す」と述べた。

世界中を駆け巡った「米朝首脳会談中止」のニュースはわずか3日で再び改められた。

強い覚悟

「米朝首脳会談の成功を通して戦争と対立の歴史を清算し、平和と繁栄のために協力する」―。

南北首脳会談の翌日、開かれた記者会見で文氏は、金委員長がそのように語り、会談への強い覚悟を示したことを明らかにした。

今回の騒動で分かったのは、金委員長があくまでも米朝首脳会談に固執していることだ。金委員長周辺が米国に対しても相変わらずの強気の姿勢で臨んでいたのはいつもの駆け引きだが、真相は「本当に北朝鮮の体制が保障されるのか」が心配なのだという。確かに米朝会談がうまくいけば、体制の維持と国内の経済立て直しをいずれも実現させる千載一遇のチャンスだ。このため、米国との仲介役として、北朝鮮は、米国がこのところ不信感を抱く中国ではなく韓国を選んだ。

文氏にとっても自らが主導した米朝首脳会談を成功させたいのは当然の思いだ。朝鮮半島の今後の和平にも関わる。しかも、今回は訪米してトランプ大統領に米朝首脳会談の重要性を強調した翌日、同大統領が首脳会談の中止を世界に公表し、文氏の面目は丸つぶれになった。しかし、南北会談では友好ムードを演出。金委員長の「非核化の意思」を引き出し、米朝首脳会談開催に向け後押しした。

溝は埋まらず

トランプ大統領も再び米朝会談に前のめりになっている。同氏は「とてもうまくいっている。6月12日にシンガポールでという予定は変わっていない」と前向きだ。予定していた北朝鮮への新たな独自制裁についても発動を見送った。

もともと、トランプ氏は会談に乗り気だった。秋の中間選挙に向けて、少しでもプラスになる材料を増やしたいのが本音だ。しかも、〝史上初〟の米朝会談となればなおさらだ。支持者との会合で、観衆から「ノーベル賞！」との声が上がった時にはまんざらでもなさそうだった。

一方で、肝心の非核化について米朝の溝は埋まっていない。北朝鮮が「完全な非核化」への意思を強調したのは朝報だが、その方法論を巡っては「完全かつ検証可能で不可逆的な非核化（CVID）」を求める米国に対し、段階的な非核化の実施で、その段階ごとに経済支援などの見返りがほしい北朝鮮との間では思惑に開きがある。これを短期間の調整で埋められるかどうかは不透明だ。

会談が迫る中、金委員長の側近、金英哲（キム・ヨンチョル）党副委員長がニューヨークで米国のポンペオ国務長官らと会談に向けた最後の詰めをするなど準備が進む。ただ、トランプ氏は準備不足を認めてか、米朝会談は「1回では終わらないだろうし、2回目、3回目が必要だ」と指摘した。

核の専門家ら多くの見方は、北朝鮮の核放棄に悲観的だ。しかし今回の金委員長の米朝首脳会談への固執ぶりを見ると、体制保障と引き替えに本気で核放棄を考えているのかもしれないとも思えてくる。万に一つかもしれない可能性を信じて、今後の米朝の動きを見守りたい。